



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.142  
2015.7.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第4回 ● 西ヶ原貝塚はモースの近代化

日本考古学を近代化したとされるモースの大森貝塚にも光と影があり、影の部分は古生物学とは異なる領域の記述に顕著に見られる。このモースの弱点を克服すべく、やがて「コロボックル風俗考」に至る坪井正五郎の西ヶ原貝塚は、本草学の伝統に基づき考古学の近代化を推進し、人類社会を洞察する新しい羅針盤である。具体的には**人類活動の単位として考古資料の体系的網羅的な分類を行い、分類単位における列島の比較形態学から人類活動の「類似」に観られる社会的相互関係を追及する方法を単独提案したのである。**

次回以降で西ヶ原貝塚の「**土器様式名称**」に至る極めて汎用的な方法に触れ、何故その方法が未完として終わるのか、それを学史的契機に学び、すぐに新たな展開へと切り替えた学の成長から「**コロボックル思考法**」に至る背景を解説するが、その前に坪井正五郎はモースの弱点を具体的にどこに見抜いたのか、明らかにしておきたい。

大森貝塚(岩波文庫訳)でのモースの本懐は、「**大昔および現生の大森軟体動物相の比較**」の章にあり、「第一、ある種では、**個体数の多寡**の変化が起きていること。第二、ある種では、**大きさ**の変化が起きていること。第三、貝のある種では**殻頂殻高比**に変化が起きていること。第四、ある種は**いまいなくなっている**という**変化**が起きていること。」(ゴチック体は引用者、以下同様)という「変化」

を重視し、古生物学の近代化として具体的な比較を可能とする手順を踏み、データと分析が正規化された科学的な考察にある。「変化」が年代の新古か、環境差か、など多くの問題を孕むものの、種の同定(分類)に加えて、計量化による比較手続きの簡素化明瞭化が近代化として重要なのである。

では、大森貝塚の土器にはどのような接近が図られたであろうか。「土器」の節を参照するならば、「大森貝塚収集の土器には、全体の形がわかるものが数多くあり、破片は何千とある。」とされ、「数多く」については「群別」の文中にて「全形が判る土器は50個あり、」で始まる「群別」の内訳が示される。「何千とある」の内容は、「発見された土器の量は**ひじょうに多く、形や紋様も千差万別**」と更に「群別」などの豊富さも強調される。それにも拘わらず、最終的な結論として「**東京の他の貝塚もまた、大森と同様、土器がひじょうに豊富であって、多くは、形・紋様構成ともに大森でみいだしたものに類似している。**」と「類似」の一言のみが放たれた。軟体動物の種別「比較」方法に見る明瞭化とは比べようもなく、このような大森貝塚の曖昧さが「本来画工だ」と吐露させたのであろうか。

坪井正五郎は上記のモースによる曖昧な記述を近代化し、対する西ヶ原貝塚では「完全と破片とを問はず発掘土器全体を見渡して**如何なる紋様が最も屢ば目に触れるか、**諸種の紋様の中で何れ

が勝を制して居るかとの事ならば**之を知る途がござります。**」との目的に従い、全ての土器を独自の方法で分類、比較形態学として計量化し、他の資料との「類似」関係を導出する方法を確立した。

全ての土器を対象とする「**其方法は追々に記します**」との小気味よい自信に従うかのように、後代の山内清男も「**縄紋時代研究の現段階**」で恐らく「其方法」を知らずして中部と関東の加曾利B式に観る地方差を指摘したのであり、「明治考古学秘史」の浸透については案外知られていない。

西ヶ原貝塚の概観を示す。「**土器片の総数**」は「底に属するものが百五十八、縁に属するものが三百十一」、「縁と底との中間即ち胴の部分の破片は誠に夥多で実に千三百四十二片」となり、「此三口を合算すれば**千八百一片**と成る。」底部は「**底面の種類**」に観られる石膏を用いた「**編み物押し形**」の復元が著名で、後代の「**石器時代にも稲あり**」に至る。

「**紋様**」の対象は「底部破片の数、百五十八を減ずれば**千六百五十三**となる。」「土器の縁の附属物」は「**縁瘤**」と「**把手**」に弁別され、後者の分類と「類似」による比較形態学は既述の通りである。更に「縁に属するものが**三百十一**」は「**縁飾り**」として分析され、共々「**紋様**」の数に加えられる。

畢竟、坪井正五郎は西ヶ原貝塚の体系的網羅的な分類と計量化により曖昧なモースの近代化に成功した。

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

## 目次

■加曾利B式土器 西ヶ原貝塚はモースの近代化(第4回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第22回) 渡辺 誠 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第135回) 加藤朋夏 …2  
■考古学者の書棚 『五箇山研究ノート』 野原大輔 …4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第22回)

渡辺 誠

## 29. 近世の焼塩壺

近世の焼塩壺の問題は、私にとっては京都以来の重要、かつ楽しみの多いテーマである。

小さいコップ形の土器で、刻印に焼塩という文字があるため製塩土器の仲間と考えられてきた。ただし器壁がきわめて厚く、小型であり、かつ破片になっていることがあまり無い点に大きな違いがあった。

平安博物館在職中に京都市内の発掘で、同僚達がしばしば発掘していたのを見て、興味をもっていた。しかし自分で発掘したのは、京都時代最後の仕事として、京都御所蛤御門前の土御門内裏跡、近世の水戸藩邸跡を発掘した時だけである。

この用途を明確に教えて下さったのは、当時近畿民具学会の会長であった小谷方明先生であった。先生は鯛(マダイ)の塩焼を食べ進むと、身が厚いので次第に塩味が薄くなっていく。君のような東京勢だったらすぐ醤油をかけるだろうが、関西ではそんな野暮な食べ方はしない、焼塩をかけるということであった。だから焼塩壺というのは、その容器であろうということであった。そして一月後の例会の時に、その資料を見せて下さった。その綴りには「前田長三郎氏一件書類」と記されていた。

その中にガリ刷りの「堺焼塩壺考(未定稿)」もあった。これは50部しか作られていない貴重書で、著者の前田長三郎氏の孫に当たる前田洋子氏の分しか知られていなかった。小谷氏・前田氏も古き良き時代の堺の文化人で、当時東京や福岡などでも焼塩壺が発見され始めたので、かつての堺の広い商圈と栄光を示すものと考えて、研究されたのである。初めからこうした姿勢で書かれていたのにもかかわらず、江戸時代の流通の広さを示すものとして研究され始めたが、先駆者のいたことは気付いていかなかった。

「一件書類」のなかには、未定稿の文字の省かれた論文の筆写されたものも含まれていた。しかも『武蔵野』誌に掲載されていたものである。誰もこれを知らなかったのであるが、学史上こんなに無視された論文もきわめて珍しい。早速武蔵野郷土館に吉田 格先生をたづね、借用させて頂いてコピーをした。ここにたどり着くまでの小谷方明、前田洋子、吉田格先生のご厚意は、本当にありがたいものであった。

そして何よりも重要なことは、刻印の変遷が明確で、明確に時期を知ることができることである。これを明らかにするための文献の渉猟にあたっては、名古屋大学に移って間もない頃に、日本史研究室の助手であった笹本正治氏(現信州大学教授)に教えて頂くことが多かった。そして大阪の高津坂下町に焼塩屋があるということも分かった。しかし場所がどこか分からない。これは当時大学院の学生で、大阪出身の前川 要氏(元中央大学教授)に調べて頂いた。結局これは高津神社の西階段下の町であった。早速たづねてみたがよくわからない。

しかし同地のある家を訪ねたところ、その家のおばあさんがよくわが家を訪ねてきたねと言って、すでに高速道路の下になっている焼塩屋の場所を教えてください、今では付き合い

のあるのは私だけだと、現在の住所まで教えて下さった。すぐその足で京阪電鉄の京橋駅まで飛んで行った。そして子孫の弓削弥七氏に会うことができ、作業工程はじめ一切のことを教えて頂くことができた。

その方が「一件書類」のなかにあった、昭和11年の朝日新聞の記事に出てくる焼塩屋主人であるご本人であった。そして堺の船待神社の話をしたところ、すぐに車を飛ばして神社に向かった。ここには八代目の焼塩屋の奉納した掛け軸があったのである。また、亡くなられた後に再訪した時には、奥さんの弓削とわさんに残されていた大学ノートを拝見した。名古屋からまた私が来たら、先に話しそびれたことを書いてあるからということであった。

こうして直接の当事者に会い、かけねのない具体的なことを知ることができること、これが民俗・民具学とも関連した近世考古学の醍醐味であった。そして中間の中世については、名古屋にきてから伊勢神宮の神官であり、民俗学者である矢野憲一先生より、御塩殿の堅塩について教えて頂き、取材の便宜もはかって頂いた。その結果、古代の粗塩→中世の堅塩→近世の焼塩という物質文化史の筋道がみえてきた。もちろん堅塩と焼塩は、二次加工された精製塩である。しかし古代にも内陸の製塩土器があり、平城京などへ運ばれていた。しかし土器自体は小さいだけで、海岸部の製塩土器と同質であり、深くは研究されていなかった。

したがって各時代を通じて粗塩が作られ、二ガリを飛ばした精製・食卓塩とが並行して存在してきたとみることができる。

そして江戸時代の具体的な使用状態が、瓦版に描かれていたのを見つけたときには嬉しかった。ペリーが来航した時の横浜でのパーティーにおいて、その二の膳に、鯛の塩焼と焼塩壺とがセットとして描かれている。メニューには「かけしおだい」と記されている。当時の有名な料理屋である百川の調理であるか、百川は現在の日本橋三越の東方にあった。そしていうまでもなく魚河岸も近くで、生鯛屋敷という地名も残っている。この日本橋をさかのぼれば、江戸城の竹橋御門にも近い。

宴会で鯛の塩焼が出るのは、ランキングの高いところである。先に記した小谷先生も小谷城々主の子孫であり、親類筋での宴会での見聞を教えてくださいましたのである。そして焼塩壺が出土するのは各地の城跡や、有名な商家・料理屋跡などに限られ、私が手掛けた例も、いわき市泉城、長野県松本城、愛知県名古屋城・岡崎城、名古屋市水戸藩邸跡などがある。

## 略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる  
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業  
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学  
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了  
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務  
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授  
 平成元年4月 同上教授  
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授  
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)  
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 135

#### 堀ノ内(ほりのうち)遺跡 ～ 秋田県湯沢市

加藤 朋夏

いろいろな意味で印象に残っているのは秋田県内陸南部、湯沢市に所在する堀ノ内遺跡です。一般国道13号湯沢横手道路の建設に先立ち、2003年から2004年に調査が行われ、遺跡は雄物川の支流である麓沢川の河原に作られた縄文時代後～晩期の墓域・祭祀域であることが分かりました。

印象に残っている理由はいくつかありますが、初めてを担当を任された遺跡だから、そして、いくつもの失敗をしたから、というのが大きいと思います。当時、私は秋田県に採用されて3年目を迎えたところでした。現場運営に関わる全てのことを自分で決めることができる、しかも自分が研究対象とする縄文時代の遺跡で、面積も3,250㎡と手頃。とにかく嬉しく、調査区内を隔々までしっかり掘ろうと張り切りました。いよいよ重機を使った表土除去が始まった時、不要な土層を完全に撤去することばかりに夢中になってしまい、気付くと隣接するさくらんぼ園との比高は2m近くに、法面の傾斜も垂直に近いという大変危険な状態になっていました。後で分かったのですが、東鳥海山麓の扇状地端部に立地しているように見えた遺跡は、実は沖積低地に立地しており、昭和20年代ごろに発生した土砂崩れの土砂で厚く覆われていたのです。電話で状況報告をすると、当時の上司が真っ青な顔をして飛んできたことを今でも思い出します。すぐに法面の保護対策をとり大事には至りませんでした。調査担当者は、安全管理の面にも注意を払う必要があることを思い知りました。

2年に亘る調査では、南北に流れる旧河川跡と、これに沿うように分布する314基の土坑や75基の土器埋設遺構が検出されました。こうした遺構が疎らな区域には大小の配石遺構や、「捨て場」と呼ばれるような遺物集中区が形成されていました。出土する大量の土器や石器の中には、顔面装飾付の特殊な土器や、計4個体の動物形土製品、土偶や岩偶、石棒などの祭祀的な遺物も多く、目を引きました。また黒曜石の剥片や、アスファルトが充填された土器、櫃原式の浅鉢の破片など、他地域からの搬入を示す遺物も出土し、交流域の広さも窺うことができました。

中でも最も興味深く感じたのは、打製石斧の出土に関してです。堀ノ内遺跡では破片も含めて299点の打製石斧と77点の未成品が出土しました。打製石斧の多くには使用痕が顕著に残されており、実際に使用されたものだったことが分かります。遺跡内に作られた土坑を掘る際に使われたものかもしれませんが、後～晩期の同じような遺跡と比べても格段に数が多いことから、調査区域外で使用されたものも役目を終えてここ持ち込まれたのだと考えました。また未成品が存在することや、制作時に出たと思われる剥片の出土が確認されていることから、ここは打製石斧の墓場であると同時に、制作場所でもあったと想定されました。と、ここまで考えて「あれ?」と思いました。似たような遺跡を調査したことがあったのです。秋田に採用されるまでの4年間を、私は北海道伊達市で過ごしました。その頃調査に携わせてもらったのが北黄金貝塚



▲堀ノ内遺跡遠景（写真手前、左右方向に旧河川跡。円形に見えるのが土坑群）

の「水場の祭祀場」です。それは、湧き水の傍らに北海道式石冠やその未成品を中心に大量の礫石器が集積された不思議な遺構でした。時期は前期ですし、出土する石器の種類も異なりますが、水辺に位置することも含めて共通点が多いのです。その根底にある精神性や思想はきっと共通している、そう感じさせられました。

また、堀ノ内遺跡の遺物集中区では、打製石斧2～3点を並べて置いたような出土状況を数か所で目にしましたが、やはり北海道伊達市で調査に携わせてもらったある遺跡の事が思い出されました。それは、ポンマ遺跡の後期の貝塚です。

一見、貝や動物の骨等がごちゃごちゃに捨てられているかのように見える貝層の中に、入れ子状に数枚を重ね合わせて置かれたホタテの貝殻や、鹿の肩甲骨の上に乗せられたクジラの椎骨、シカ



▲堀ノ内遺跡で出土した打製石斧

の第一切歯ばかりを集めたスポットなど、何らかの儀式的痕跡らしきものが遺されていました。所謂捨て場も、現代の私たちが持っている「捨てる」という感覚とは全く異なった意識の元に形成されたものだ、この時、確信しました。

北海道にいたころに目の当たりにしたいいくつかの遺跡と、時期も出土する遺物も大きく異なる秋田の遺跡を掘ったはずでしたが、根本に持っている精神性は同じものだ、そう感じずにはいられませんでした。そして、これが「縄文文化」なのだ、と妙に納得させられました。

土器文様の違いや道具の組み合わせの違いなど、目に見える部分に気を取られがちですが縄文文化の本質を探る上で一体何が重要なのか、堀ノ内遺跡の調査を通して、大きなヒントを貰ったような気がしています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは水戸部秀樹さんです。

## 考古学者の書棚

## 「五箇山研究ノート」

米澤 康 著／越飛文化研究会 (1962)

野原 大輔

私にとって「限りなき鞭」というべき本を紹介したい。

考古学を志して間もない頃、法事を終えて実家で寛いでいるとお手継ぎのお寺さんが訪ねてきた。その人は西勝寺住職、故・米澤康氏である。西勝寺は富山県南砺市利賀村にある浄土真宗の寺で、五箇山では赤尾の行徳寺にならぶ中心的な寺院である。氏のことは「御坊様」と呼び、互いに顔馴染みの間柄であった。我が家とは寺と檀家の関係で、祖母が幼い氏を子守りした話を家人から聞かされていた。

その氏が手に著書を2冊持って玄関に立っていた。1冊は「越中古代史の研究」、もう1冊が「五箇山研究ノート」である。氏が富山大学で教鞭を執っていることは聞いていたが、古代史の研究者だとその時に初めて知った。それから交流がはじまった。氏が亡くなるまでの間、盆や正月に帰省すると必ず「遊びに来なさい」と電話が掛かってきた。寺の奥の部屋に通され、日がな一日、考古学や古代史の談義に明け暮れた。寺が所蔵する考古資料や本、書きかけの原稿を見せてくださったり、夏の暑い日には一緒に素麺をすすったり。議論に熱中して深夜に及ぶこともあり、いつしか実家に帰省するときの大きな楽しみになっていた。亡くなる数ヶ月前にも招かれ、体調を気遣うと「君と話すのが楽しいので大丈夫です。」と穏やかな表情でおっしゃった。今もその言葉が脳裏に響く。

氏が30代半ばで著したのが本書である。構成は次のとおりである。

- 第Ⅰ部 五箇山における諸問題
- 第Ⅱ部 資料と覚書
- 第Ⅲ部 研究余滴
- 第Ⅳ部 回顧と展望
- 第Ⅴ部 五箇山白川郷関係文献目録

後にも先にも五箇山を網羅的に記した著作は本書しか存在しない。今でこそ「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が世界文化遺産に登録され、国内外から多くの耳目を集めるが、本書が上梓された昭和30年代に五箇山に注目する研究者は少なかった。刊行から50年以上経つが五箇山研究のバイブルといっても過言ではなく、今なお本書の大筋は通用する。資料的な追加があるとすれば、東中江遺跡や矢張下島遺跡での発掘調査の成果などであろう。

さて、本書は五箇山を考古学・民俗学・歴史地理学など多角的な観点から論じたものである。

考古学の項では遺跡名と遺物の一覧を作成し、その分布から五箇山の縄文文化の母体は庄川であること、その時期は中期以降であったこと、中部山岳地帯の縄文文化の昂揚と軌を一にしていることなどを推断している。

また、五箇山とは下梨・利賀谷・小谷・上梨・赤尾の5つ

の谷の地域的呼称であり、16世紀初頭に成立するが、その成立については「五箇山は自制的な一村落の呼称でもなければ、政治的な制度に基いて生まれた行政区画のそれでもない。歴史的地理的諸要因に基いて形成された村落の連合の共同体に他ならない」とし、その成立には「荘園的土地所有制の崩壊」と「惣村形成の歴史的動向」と密接に関わるとの見解を示している。平家の落人伝説などは登場しない。

歴史時代に入ってから越後上杉氏との関係や加賀藩による五箇山支配体制にも言及する。上杉謙信は城生城(富山市)の斉藤次郎の要請で越中に侵攻し、椎名康胤の拠る松倉城を攻略している。城生には西勝寺という寺院があり、開基明宗の長男が五箇山下田の西勝寺に入った。当時、謙信は対織田信長という点で本願寺と手を結んでおり、五箇山の本願寺系寺院も斉藤氏の仲介により謙信の影響下にあったと氏は指摘する。この西勝寺こそ氏の自坊である。

また、合掌造り民家の成立と崩壊や民俗・伝説・植物など内容は多岐に渡る。若き日の氏が感性の赴くままに縦横無尽に五箇山研究に没頭した姿が伝わって来るようだ。また氏はお国自慢的な郷土史を嫌い、資料を丹念に読み込む姿勢を貫いた。古代史が専門であるが、その周辺分野の学問にも造詣が深く、とくに考古学に強い思いがあったように感じた。

氏が歴史学を志した契機は、祖父・米澤安立の存在である。安立は富山県考古学の草分け的存在で、明治末年から大正初めにかけて山深い五箇山にありながら考古学をはじめ人類学・民俗学に造詣が深く、疾風のように駆け抜けた研究者である。明治39年(1906)34歳のとき、坪井正五郎が会長を務める東京人類学会に坪井の紹介で入会、翌年には考古学会にも入会している。自宅には徴古室なる資料室を設置し、遺物の収集に精を出した。論文も多数世に出したが、大正7年に46歳の若さで早逝した。氏が生まれる10年以上前である。

米澤康にとって祖父安立の存在が「限りなき鞭」であったという。それは自分にとっての氏の存在と重なる。氏が亡くなった後、その意思を継いで「利賀村史」の編纂に携わり、苦心して刊行に漕ぎつけたことは多少の自信となったが、その業績においてはまだ足元にも及ばない。本書を眺めるたびに叱咤される思いである。

## アルカ通信 No.142

発行日 2015年7月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp